

一次の文章を読んで、問一〜五に答えなさい。(配点八〇点)

生活の中の「公的」部分としての社会的行動の大方が、予め外側から与えられた決まりや掟に従って止むを得ず行なわれる「公式の務め」という性格を帯びて来ると、人々の自然な関心は現に在る社会関係とは別の処に向き始める。

その際の「別の処」に向かう関心は、昔なら神様や彼岸などに帰依する方向を探るのが一般的であった。そしてそういう、此の世の社会関係からの宗教的超越が多くの人々に普及すると、結果として、帰依者の間に、別の社会(もう一つの此の世)が産み出されるのであった。しかし今日の場合には、そうした超越の方向は一般的ではなくて、むしろ逆に「自我」の方へ自発的関心を収斂するのが支配的な方向となっている。世界のメカニズムが分つて了つて(或は分つた積もりになつて了つて)、神秘的な原因などは想像も出来ない状況になつて来ると、「世俗化」がカントツして宗教的超越は中々起こりにくい。おまけに、生活資料の全てを大量生産・大量流通の大体系に負つて了つて今日では、「鯨の腹中に」すっぽりと呑み込まれていることを全ての人々が知っているのだから、例外的少数者を除けば、「別の処」に向き始める自然な関心の的は、殆ど自動的に自我へ「私」へと絞られていく。こうして現代の今日的局面は精神的には「大衆的規模における自我の時代」となっている。

しかし、自我への収斂と言つても今日のそれは、自我を問題として思考の前に据え、疑いの対象として取り扱おうとするものではない。そういうデカルト的な知的懐疑でもなければ、芸術的想像の領域でデカルト的懐疑に等価であった『リア王』の問いでもない。「私が何者であるか誰か教えてくれ」というリア王の問いは、それに答えた「リアの影さ」という道化の返事によって、その問いが持つ自己否定性を明らかにする。存在する何者かではなくて藻抜けの殻に過ぎないのではないか、というツウレツな疑いが自分に対して向けられている。今日の社会に一般的な自我への関心の集中は、そうした現存の自己に対する否定性を持たないのが普通である。此処に在るのは、疑いの対象としての自我ではなくて、それ自体が目的とされている自我なのであり、「虚偽を含んだ自我を否定していく自我」ではなくて、現に在る自我を大事にそのまま肯定し、出来る事なら何処までもそれを延長

していこうとする自我なのである。すなわち、所与の欲求の充足を事とする心理学的自我であり、そこに働いている「理性」はと言えば、主として、充足における損得をカンジヨウする計算なのである。バランス・シートが今日の「理性」なのであるか。

生産者としての側面(すなわち物事の自然と直接向かい合う側面)を膨大な機構的体系の中に吸収されて了って、その体系の中で微塵と碎けて雲散霧消し終わった存在が、残された消費の側面だけで自己の働きを安全に發揮しようとする時、そこに発生する自我志向は、今述べたような、欲求の満足を目指す自己内運動とならざるをえないであろう。そうなる社会的根拠は十分に存在している。そして何人と雖もその根拠から完全に自由ではありえない。しかし、根拠のあることだからといって、その自我志向が構造的性質としてナルシズムの病気を抱えているものであることは見失ってはならないであろう。

自我の満足だけをひたすら追求する態度を、或る種の精神医学はナルシスの故事とは別に、一般化して「ナルシズム」と呼んでいるようだが、しかしその故事とその態度の間には矢張り構造的類似があるに違いない。池の面に映る自分の映像に恋慕して止まない姿の底には、事の性質上いつまで経ってもその映像を腕に抱くことが出来ないところから来る、欲求不満と不安の潜在的昂進がひそんでいる。丁度そのように、現に在るままの「自我」を丸ごと肯定して、その欲求の満足をひたすら追求するところには、自足よりも不満と不安が絶えずつきまとう。

具体的な物と対面する関係の中で生きている自我は、物それ自体の限界を己れの欲求の限界として自然に自得する。全ての知覚形式を通して総合的に物の限界を自ら知るのだから、その自制は、道学的命令による外からの制限などは違って、極めて自然な内側からの自足となる。しかし、大量生産と大量流通と大量消費の機構の中に沈没して、物との関係を失った製品咀嚼器としての自我が発する欲求は、糸の切れた罫のように無限定なものとなっている。それは、物の限度を自らの全知覚を通して内側から納得していく自然の制動機を内蔵していない。消費の自我に加えられる制限は、物との相互関係ではなくて金銭という名を持つ「印刷された紙切れ」の保有量の限界だけである。その「記号」の命令だけが欲求に禁止を指令する。道学的禁令に代って、流通無碍なる紙切れの記号が、同じく外側から禁止命令を加えるのである。かくて、欲求不満は極めて当然に起こって来る。

そして、不安定な性質を宿命的に持つているから、それだけに却て用心深く自我防衛の機制を作り出そうとする。自分に対して余計なキョウイや驚きを与える可能性を持つているもの、すなわち「他者」は、それが人であれ物であれ事であれ、いきなり自分に遭遇することの出来ないように遠ざけられる。自分をカプセルに容れるのである。繭のような「家庭」が此処に作られ、違和感を除去した「優しい友達」を周囲に取りよう。「他者」との対面的な相互交渉である経験がこうして周到に排除される。

しかし、無菌状態の温室から、世界の事物を手前勝手に選別して、自分にピッタリ来るものだけを採用する態度が行き渡っている処では、世界はどうしても変形を蒙らないわけにはいかない。世界はそれ自体として存在する物ではなくて、消費されるためにだけ、そしてそれまでの間一時的に存在している仮の物に過ぎなくなる。物件目録にまで貶しめられた世界がそこに横たわっている。私たちを組み込んでいる現代的ナルシズムは、このような世界像を裡に秘めている。

今日、日本国中に行き渡って来ている「技術大国」の自惚れや、南北諸地域の山を買い叩きながら「日本には総面積の六割を超える森林がある」と言って誇る態度や、海から草原から濫獲して来た品々の山を身近に持つていることを私たちの「豊かさ」として満足している様子などは、尽く、製品の発生過程が、物の内部にだけ存在する「隠された次元」となって、直接に知覚できないところから来ている。その限りで、それらの現象は、「生産の社会関係」が隠蔽されて、製品それ自体が独り歩きしながら、その持つ消費上の美質が魔的魅力を恣にして「製品の物神崇拜」の表れに他ならない。そうして、ひたすらに肯定的な自我の行なう満足追求は、そうした「物神崇拜」を促進する精神的要因ではあっても、それに制動を加えるものとはならない。自我のナルシズムは、こうして、集团的ナルシズムの基盤となる。自分が不安定であるだけに一層集团的自惚れに融け込もうとする。

私たち自身を、暮らしの仕組みそのものにおいて捲き込んで此の状況を、もし望ましくないとするならば、どうすればよいのか。「省エネルギー」的自制や身の廻りの「自然」を回復することも必要なことではあろうが、根本的には自我の組み替えがなければならぬ。ナルシズムの自我に替えて「他者」について考える自我が蘇らなければならない。古びた文句をもじって言うなら、「私は他者について考える。故に私は存在する。」となることが必要不可欠である。むろん「他者」とは、自分の外にある物で

あり事であり人であり動植物であり……それら一つ一つのものの総称に他ならないのではあるが、同時にその言葉は「見知らぬ者」としてそれら全ての物に接すること——そういう方法的態度——をも含んでいる。

全てに対して「見知らぬ間柄」に立つ者は「初めて見る者の不思議そうな眼をもつてまるで「奇異なもの」を見るように物に見入る。夢中に見入るその注視は、ポカンとした「放心」と「自失」を含んでいるし、同時に見入っている物に対しては「極度の覚醒」を持つことになる。その時に、物を手段として扱っている時には決して見えて来なかった「物の隠された次元」へと眼が届くのであり、物の自然をそのものに即して発見するのである。だから「物について考える」とは、他でもなく、その物に対して「親密である者から見知らぬ者へと立ち戻ること」なのである。飼い馴らして自分の消費手段にしようとするのではなくて、初めての存在に接する事が含む「奇妙な不審を我がものとする事なのである。そのゼロの意識状態、此の世の境に立ち戻った状況が「他者をそれに即して考える」ことに他ならない。

その状況においては、自分の抱く期待や不安や恐れや喜びなどの感情もまた、「見知らぬ者」の初めて見る怪訝さをもって見入られるのであって、そこにこそ、自分の内側を無心に解析する自我が発生する。そしてこの自我が持つ白痴的な「放心」と「自失」、「見知らぬ者」の好奇心がもたらす「極度の覚醒」の下では、ナルシズムは起こる余地がない。

しかし、そういう自我を生み出す道は、完璧な確かさを以て歩むことの出来るものではない。すべての者が「鯨の腹中に」呑み込まれて生きている今日においては、「見知らぬ者」の眼付きについて深い洞察を行なった当の思想家本人が既に今世紀前半に危機のユーモアを込めてもじっているように、「私は時々考える。故に私は時々存在する」しかないのである(P・ヴァレリー)。しかし、確実性と恒常性を失って時々立ち戻っては息を吹き返す間歇的存在となった「私」ではあるけれども、その些かコミカルな間歇的存在がもたらす制動と抑制の働きは、決して無視できるほど小さなものではない。それある限り少なくともナルシズムに加速はかからないのである。物について考える間歇的存在に出喰わす度にナルシズムは中断され、スタートのやり直しをヨギなくされる。

そしてもし、その間歌的存在の分布する数が増え、その間歌性の発生頻度が多くなつた場合には、それらの相互的な集合の結果、「他者」の存在を確認し、我々の外に立っている物の自然な世界を蘇らせ、したがってそれに向かつて虚心に対面する「我々」となるかも知れないのである。その時の「我々」こそは慎み深い私たちの社会となる。その時には、「雪がコンコン降る。／人間は／その下で暮らしているのです。」と言つて嘗て私たちに敬虔さの何たるかを教えてくれた山村の一少年の感受性は、私たちの社会の共通項となつて生き返ることにならう。そしてその社会は「鯨の腹中」の異物となつていくらかの可能性を担うことになる。

(藤田省三「ナルシズムからの脱却——物に行く道」より)

〔注〕 ○デカルト——フランスの哲学者(一五九六～一六五〇)。

○『リア王』——イギリスの劇作家シェークスピア(一五六四～一六一六)の代表作の一つ。

○バランス・シート——貸借対照表。

○P・ヴァレリー——フランスの詩人・批評家(一八七一～一九四五)。

○間歌——間隔を置いて物事が起こったり止んだりすること。

○「雪がコンコン降る。／人間は／その下で暮らしているのです。」——三行詩「雪」の全文。山村の中学生の詩や作文を集めた『山びこ学校』(一九五一年刊)の冒頭に置かれた作品。

問一 傍線部(a)～(e)を漢字に改めなさい。楷書ではつきりと、くずさないで書くこと。

問二 傍線部(ア)「製品咀嚼器としての自我が発する欲求は、糸の切れた凧のように無限定なものとなっている」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(イ)「物件目録にまで貶しめられた世界」とあるが、どういふことか。八〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(ウ)「私は他者について考える。故に私は存在する」とあるが、どういふことか。八〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(エ)「その社会は「鯨の腹中」の異物となっていくらかの可能性を担うことになる」とあるが、どういふことか。一六〇字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、問一〜五に答えなさい。(配点四〇点)

尾州に山田二郎源重忠といひしは、承久の時、君の御方にて打たれし人なり。弓矢の道、人にゆるされ、心もたけく、器量も人にすぐれたりける者なり。心やさしくして、民の煩ひを思ひ知り、よろづ優なる人なりけり。所領の内に山寺法師ありけり。八重つつじを持ちたりけるを、欲しく思ひて、「乞はばや」と思ひながら、我が心をもて思ふに、かれも愛し思ふらむを、い^(a)かが情なく乞ふべきと思ひ返して、日ごろするに、ある時、かの僧大きな過ありて、まどふべきことありけるに、藤兵衛尉^(a)にがしといひて、検断しける侍に仰せつけて、「この科料に、『七疋四丈の絹をやまゐらする、八重つつじをやまゐらする』といひて、過におこなへ」とぞ、下知せられ^(b)イ。藤兵衛尉行き向かひて、「しかしかの仰せなり」といへば、この僧、「七疋四丈をこそまゐらせ候はめ。このつつじをもて、心をも慰め候へば」と申しけるを、主の心を知りて、「絹をまゐらせては御不審のこることもやあらむずらむ。ただつつじをまゐらせ給へ」といひければ、力なくて掘りて奉る。さて、^(c)「検断の職は、半分の得分なり。三疋四丈の所に、つつじのおろし枝一つとるべし」といふに、「絹をまゐらすべし」とて、惜しみ^(a)□ども、おして取りて^(b)ハ。共にやさしくこそ。かのつつじ今にあり。近代はかかる人ありがたくこそきこゆれ。

奈良の都の八重の桜ときこゆる、当ても東田堂の前にあり。そのかみ、時の后上東門院、興福寺の別当に仰せて、かの桜をめされければ、掘りて車に入れてまゐらせけるを、大衆の中に見あひて、事の子細を問へば、しかしかと答へけるを、「名を得たる桜を、左右なくまゐらせらるる別当、返す返す不当なり。ひがことなり。かつは色もなし。後の仰せなればとて、これほどの名木をいかでかまゐらすべき。とどめよ」とて、やがて貝吹き、大衆催しておしとめ、別当をも払ふべしなどまでののしりて、「このことによりて、いかなる重科にもおこなはれば、我が身張本に出づべし」とぞいひける。この事女院きかせ給ひて、^(c)「奈良法師は心なきものと思ひたれば、わりなき大衆なり。実に色ふかし」とて、「さらば我が桜と名づけむ」とて、伊賀の国余野といふ庄を寄せて、花垣の庄と名づけて、垣をせさせられ、花のさかり七日、宿直を置きてこれを守らせらる。今にかの庄、寺領たり。昔もかかるやさしきことはありけるにこそ。

(『沙石集』より)

[注] ○尾州——尾張の国。

○承久の時——承久三年(一二三二)、後鳥羽院が鎌倉幕府を攻めて敗れた承久の乱の時。

○御方——味方。

○検断——警察権・裁判権を行使すること。

○科料——罪科をあがなうための金品。

○疋——一疋は布二反な。成人二人分の衣料にあたる。

○おろし枝——切りおろした枝。挿し木に用いる。

○東円堂——興福寺にかつてあつたといわれる堂。

○上東門院——一条天皇(在位九八六〜一〇一一)の中宮。藤原彰子。

○別当——寺務を統轄した僧官。

○大衆——興福寺の衆徒。奈良法師に同じ。僧兵として知られる。

○貝吹く——合図のほら貝を吹くこと。

問一 『沙石集』の著者は誰か。次の中から一つ選び、(あ)〜(お)の記号で答えなさい。

- (あ) 道元 (い) 一休宗純 (う) 景戒 (え) 西行 (お) 無住

問二 空欄 、、 には助動詞「けり」の活用形が入る。解答欄に適切な活用形に直して書きなさい。

問三 傍線部(a)、(b)、(c)をそれぞれ現代語訳しなさい。

問四 二重傍線部A「検断の職は、半分の得点なり。三疋四丈の所に、つつじのおろし枝一つとるべし」と言ったのは誰か、またこれはどのようなことを言っているのか説明しなさい。それぞれ①「発言者」、②「説明」の解答欄に記入すること。

問五 二重傍線部B「昔もかかるやさしきこと」とあるが、作者はどのようなことを「やさし」と評しているのか、文脈に即して一〇〇字以内で説明しなさい。

三 次のAとBの文章を読んで、問一〜四に答えなさい(設問の都合で返り点、送り仮名を省いたところがある)。(配点三〇点)

A

葉公語ニ孔子曰、「吾党有ニ直レ躬者。其父攘レ羊、而子証レ之。」孔子曰、「吾党之直者、異於是。父為レ子隱、子為レ父隱。直在ニ其中一矣。」

(『論語』子路篇より)

B

建康女子任提女、坐ニ誘口一当レ死。其子景慈對ニ鞫辞ニ云、「母実行レ此。」是時法官虞僧虬啓称、「案子之事レ親、有隱無犯、直レ躬。証父、仲尼為レ非。景慈素無ニ防閑之道死。有ニ明目之擿。陷ニ親。極刑一傷レ和損レ俗。凡乞レ鞫不レ審、降ニ罪一等、豈得避五歲之刑、忽死母之命。景慈宜加ニ罪辟。」詔流于交州。

(『隋書』刑法志より)

〔注〕

○葉公——春秋時代楚^そ国の葉の長官、沈^{しん}諸^{しよ}梁^{りやう}。

○党——村里。

○建康——現在の南京市。

○坐誘口——人を誘拐したかどで。

○鞫辞——取り調べ。

○仲尼——孔子のあざな。

○防閑——防いで止める。

○明目之揆——明白な証拠。

○乞鞫不審——家族の願い出による再審査の結果、犯罪事実が不明確であった場合は。

○五歳之刑——五年の徒刑。死罪から一等減じた刑にあたる。

○罪辟——刑罰。

○交州——現在のベトナム国ハノイ市。

問一 傍線部(a)「異於是」の「是」が指す内容を具体的に説明しなさい。

問二 傍線部(b)「有隱無犯」を、「隱」と「犯」が何をどうすることかを明らかにしながら、現代語訳しなさい。

問三 傍線部(c)「豈得避五歳之刑、忽死母之命」をすべて平仮名で書き下しなさい(現代仮名遣いでよい)。

問四 傍線部(d)「流于交州」とあるが、なぜ交州へ流刑になったのかを説明しなさい。